

北海道内における円筒土器文化期の顔を表現した土器について

影浦 覚

【論文】

北海道内における円筒土器文化期の顔を表現した土器について

影浦 覚*

キーワード：顔面表現 円筒土器

要旨

福島町館崎遺跡の土器を整理する中で、顔を表現したとみられる資料が複数個体確認された。類例を調べたところ、縄文時代中期前半に岐阜県を西端として東日本各地で顔を表現した土器が作られていた様相が窺われた。この種の土器について道内では1桁の類例しか周知されておらず、ほとんど注目されていない状況であったが、改めて調べてみたところ渡島半島を中心に道央部にかけて80個体ほどが数えられた。本稿では、管見で確認した道内の円筒土器文化期において顔を表現したとみられる土器を集成するとともに、顔の表現であると判断される根拠や問題点、成因についても論及してみたい。

1. はじめに一発端

筆者は北海道新幹線の関連事業で福島町^{たてさき}館崎遺跡の調査と整理報告に携わった。調査は3年にわたって行われたが、調査面積2,171㎡のほぼ全域が縄文時代の盛土遺構という極めて特異な遺跡であった。出土土器の総点数は約91万7,150点、器形全体の4割以上が残存した土器は1,933個体を数える。縄文時代前期末の円筒土器下層c～d式相当が752個体（約39%）、中期前半の円筒土器上層式相当が1,017個体（約53%）あり、これらで出土した土器の9割以上を占めている。

さて、これらの土器を整理している中で、文様帯、特に突起部分に顔を表現したのではないかと疑われる土器⁽¹⁾がいくつか確認された。それらは円筒土器上層a2式から見晴^{みはらし}町式までの各型式で認められた。このため顔面意匠の土器を網羅的に集成している論考（吉本・渡辺 1994・1999・2005）を参照したが、直近の2005（平成17）年段階でも北海道の類例はわずかに3例であった。しかし、館崎遺跡だけでこれだけ出土するのなら、他遺跡でも同様のものが知られている実数よりも多く出土しているのではないかと考えられた。そこで、円筒土器が出土している道内の報告書を調べてみたところ、顔を表現した可能性が窺われる土器は相当数が確認できた。もっとも多いのは道南の渡島半島、特に津軽海峡沿岸部に位置する遺跡であったが、ほぼ円筒土器上層式の道内における分布圏と重なっており、いずれ何らかの形でこれらの土器を集成周知しなければならないことを痛感した。

2. 研究史抄

管見で把握する限り、北海道で顔を表現した土器について取り上げた論考は非常に少ない。道内の研究者によるものでは大場利夫による「北海道の人面文様土器」（大場 1965）が唯一例かもしれない。大場はここで、中期2例・後期5例の計7例を紹介し、「縄文文化中期及び同後

*公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

期の年代に製作されたものばかりであって、目下の所では縄文文化前期のもの、同晩期のものは発見されていない」(同上:92)とし、性格については函館市サイベ沢遺跡や上磯町(現北斗市)茂辺地遺跡で土偶と共伴した事実などを踏まえて、「土偶などと、ともに葬制に関連してつくられたものであるように感じられる」(同上)との考えを述べ、特に円筒土器文化期のものについては、「円筒土器文化並びにその文化を母体として発展したと考えられる土器文化圏内で、土偶が比較的多く出土する地帯に見られる」(同上)とした。

その後、発掘件数、報告書刊行数は急増していくが、顔を表現した土器についての折々の集成等は道内ではなされていない。報告者が顔を表現している可能性を記載すること自体ほとんどない状況であり、議論の俎上にすらのぼらなかったと推察される。

90年代になると道外の研究者によって、広域での網羅的な集成作業がなされ、その中で道内の類例も取り上げられるようになる。名古屋大学の吉本洋子・渡辺誠による「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究」(吉本・渡辺 1994・1999・2005)と題した一連の論考がそれで、北海道西南部から岐阜県西部までの広域を対象とし、追補も含めて三次に渡って顔を表現した土器の集成を行なっている。しかし、他県の類例が回を重ねるごとに増加するのに比して、道内のものは3例の報告にとどまっている。この3例というのは、大場論考で紹介されている函館市サイベ沢遺跡(中期前半 図5-75)、森町オニウシ遺跡(中期前半 図5-62)、それと新規の函館市(旧戸井町)釜谷2遺跡(後期前葉)の資料である。大学による集成としては他に弘前大学の藤沼邦彦・栗原徹による「青森県五戸町大久保遺跡出土の縄文中期の顔面付土器」『亀ヶ岡雑考集』(藤沼・栗原 2008)がある。こちらは円筒土器文化期に絞ったものだが、論考中に「円筒上層式にともなう顔面付土器の集成一覧」があり、北海道2例、青森県14例⁽²⁾、岩手県と秋田県では確認されていないとのことであった。北海道2例は吉本・渡辺集成と同様、大場論考で紹介された類例から40年以上まったく増加していない状況を示している。吉本・渡辺集成は、大場論考で紹介されたものが取り上げられていない時点でその集成度合いに疑問符がつくが、いずれにせよ道内の類例が2、3例止まりである根本的な背景として、報告書で各担当者が顔表現の可能性に触れていないことが作用しているのではないと思われる⁽³⁾。

他、顔を表現した円筒土器については、青森県の研究者による報告・論考がいくつかある(葛西 1980, 成田 1991・1994, 平山 1997)。このうち成田は、文様施文の差で、顔面付き土器を次の3類に分類した(成田 1991)。「A類-顔の輪郭を三角形に縁取りしているもの。B類-顔の縁取りが見られないが、目・口・鼻の表現が明瞭なもの。C類-顔面表現を簡略化したもの」(成田 1991:1-2)。さらに、「A・B類は眉・鼻部は粘土紐で表し、目・口・鼻孔を刺突で表す。C類は口部を刺突、目は粘土瘤で貼り付けくぼませている。また捺糸圧痕を用いて表現しているものもある。顔面表現として、当該期の土偶の製作技法と類似点が指摘できる」(成田 1991:2)と共通する技法を説明した上で、土偶との類似性を指摘した。その上で、集成結果から「縄文時代中期に於ける顔面付き土器の変遷は、円筒上層a式の段階でC類の簡略型の顔面が出現し、特に円筒上層d・e式の段階でピークを迎える。しかし、円筒上層b・c式では現在の所発見されていない」(成田 1991:2)と型式ごとの様相を言及した。おおむねこの傾向は、北

海道でも合致するが、円筒上層b・c式については見解が異なる。その理由については後述する。

なお、土器への顔表現そのものを主題としたものではなく、主に関東や中部地方の土器に着目した内容ではあるが、近年では、認知考古学的手法によって、当該期の土器にメタファー（隠喩）として人体造形がなされた可能性を指摘する論考・書籍もいくつか公刊されている（小杉 2006；大島 2016）。

3. 顔の認識について

普通に「顔」と言えば、その構成要素として、スペースとしての面があり、面の中心線を境に左右対称二つの目が並び、目と目の間、面の中心線上に鼻、その下に口、面の外側の左右に耳という配置が、誰しも思い浮かべられることかと思う⁽⁴⁾。

しかし、表現行為上の顔となると、構成要素の条件・事情は大きく異なってくる。

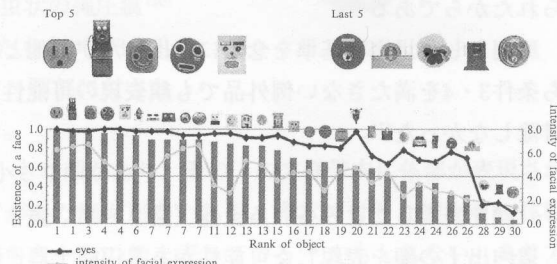


図1 (Ichikawa et al. 2011)

古今東西の顔を表現した芸術作品や、マンガにおける顔の表現、あるいは「へのへのもへじ」に代表される落書的な顔等、表現された顔というものを思い浮かべると、現実的な顔に対する二つの改変（デフォルメ）が表現手段として普遍的に行われていることが理解される。

その二つの改変というのは、すなわち省略・抽象化と誇張である。すなわち、顔の範囲を確定する面がなくても、目と鼻と口が表現されていれば、そこに「顔」を認識することができる。これは、顔（表情）というものが、さまざまなサインを示す重要な社会記号として機能してきたからに他ならない。心理学用語でシミュラクラ現象というものであるが、顔でないものであってもパーツの配置さえ一定条件を満たせば、そこに顔を想起する本能が人間に備わっていることが、実験（図1）によっても確かめられている（Ichikawa et al. 2011）。典型例としては電車や車のフロント部を見て無意識に顔を読み取った経験は誰しもあるかと思う。さらに人間には、そこに存在しないものを「ある」と認識し、補完してしまうエーレンシュタイン錯視等の本能も備わっており、面に相当するスペースがあっても目に相当するものが二つ並んでいるだけで、そこに「顔」を認識する場合もある⁽⁵⁾。極言すれば、面の中心に鼻を想起させる隆起があるだけで、目や口の表現がなくても、そこに省略された顔を読み取ることすらあるであろう。

さて、土器に表現する「顔」というものを考える際にも、もちろん省略と変形とが普遍的に行われていたことを前提視しなければならない。しかしながら、省略と変形の可能性を無制限に前提視すれば、研究対象になりえないことも事実である。研究対象として取り扱うからには、いくつかの客観的に判定しうる認定基準がなければならないであろう。今回筆者が調べたところでは、80点ほどの類例が数えられた。これらを型式別に提示する前に、まずは筆者が設けた

四つの認定基準を以下に提示したいと思う。

1. 突起部および突起下部のスペースに顔表現が施されていること。
2. おおむね線対称であり、左右に二つの目の表現が認められること。
3. 表現技法において共通パターンが複数例で認められること（空間的共通性）。
4. 顔の表現における施文パターンが型式の前後にも見いだせること（時間的共通性）。

このうち1・2が原則的な基準であり、3・4については副次的基準である。原則的な基準として目の表現を取り入れたのは、鼻や口が省略されても目が表現されていれば顔だと認識しうる場合がある反面、目が表現されていなければ顔だと認識することは難しいのではないかと考えられたからである⁽⁶⁾。

原則として以上の基準を念頭に抽出したが、他との共通項が見いだせない単品もの、すなわち条件3・4を満たさない例外品でも顔表現の可能性が高いと判断したものについては、これを排除しなかった⁽⁷⁾。

4. 顔を表現したとみられる土器（図2～7 表1 図版1～3）

道内出土の顔を表現した可能性がある円筒土器⁽⁸⁾は26遺跡82例を数えた。円筒土器下層d¹2式の1遺跡1例が最も古く⁽⁹⁾、間を置いて上層a2式4遺跡11例、上層b式9遺跡18例、厚真1式と思しきもの1遺跡1例、サイベ沢Ⅶ式古段階15遺跡36例、サイベ沢Ⅶ式新段階9遺跡10例、サイベ沢Ⅶ式相当のもので新旧を判別しがたいもの3遺跡4例、見晴町式1遺跡1例。時期的にはサイベ沢Ⅶ式古段階の36例、一遺跡での出土点数では福島町館崎遺跡の15例が最多で、森町オニウシ遺跡の11例がそれに次ぐ。館崎遺跡の15例については点数が多いだけでなく複数型式にまたがっており、土器への顔表現も盛土形成同様に継承の可能性が窺われる点で非常に興味深い。

以下、型式ごとに概観する。

円筒土器下層d¹2式（縄文時代前期末）

福島町館崎遺跡出土の1例（図2-1）のみである。口縁部に2か所、楕円に穿孔して目を表現している。目と目の間、三角形の空間を文身風の刺突を充填させ、あたかも鼻を想起させるような構成になっていることから顔と認定した。報告によると本資料は赤彩土器である。

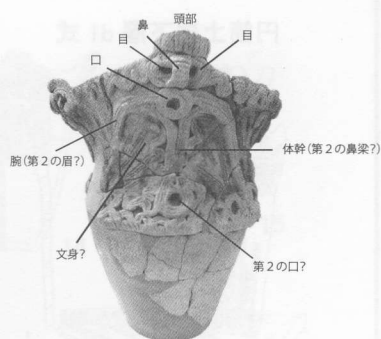
円筒土器上層a2式（縄文時代中期前葉）

全11例中8例が館崎遺跡である。他は八雲町栄浜1遺跡、室蘭市ボンナイ遺跡、千歳市キウス5遺跡から各1点が出土している。

この段階は口縁部文様帯の幅が拡がり、大ぶりの4つ対の突起が出現する。弁状の突起では頂部が二股に分かれるものが多く、肥厚したまま内側にめくれ、浅いくぼみを呈するものが一定数ある。また、突起下に貼付で区画したスペースを持つものが顕在化する。貼付の区画は紡錘形や円形、あるいは三角形や台形をなすものなど多様である。顔の表現は口縁部の突起、あるいは突起下の区画部になされる。後者では貼付で区画したスペースを顔の面としている。

この段階における目と口の表現に関しては主に、円環状の貼付によるもの、ボタン状の貼付

によるもの、縄を渦状に付して表現するものの3種がある。
 Y字あるいはT字の貼付を付して眉と鼻梁を表現している
 もの(図2-2・6・8)があるが、これは土偶の顔表現と共通
 するものである。口に関しては、円環状の貼付や渦状の縄
 圧痕など目と同じ表現のもの(図2-2~5・7)がある一方で、
 目と別に貼付で区画して口を表現したもの(図2-6・8・9、
 図3-11・12)もある。この場合は、貼付で区画した中に縄
 線を横位に付すもの(図2-8)がある。おそらく歯を表現し
 ていると思われるが、続く上層b式では地虫状の縄圧痕⁽¹⁰⁾
 を充填したもの(図3-16)や刺突を充填したもの(図3-15)
 もある。また、口が文様帯下に突き出して、胴部に付され
 るもの(図2-2・4・8・9、図3-12)もある。



図版1

図2-5(図版1 拡大写真)は突起部に小さな顔があり、その下の文様帯内に体部が表現され
 ているが、あるいは体幹が鼻梁、左右に下がった腕が眉ないし髪、渦状に付した縄が目、体幹
 下にある円環状の貼付が口と、体部全体がもう一つの顔を表している⁽¹¹⁾かもしれない。あり方
 は異なるが、続く上層b式期においても胴部に顔を表現したとみられるもの(図3-26)はある。
 なお、この土器は鏡餅状を呈した突起上部が頭部を表現しているとみられるが、外側だけが土
 手状に隆起して、内側は皿状にくぼんでいる。図2-4の頭部(突起部)も同様に内側が大きくく
 ぼむものである。突起形状は、続く円筒土器上層b式に向けて台形状となり、徐々に突起上辺
 の中央がへこみ、上層a2式の後半段階では緩やかな二股を呈するようになるが、その段階では、
 突起左右の斜辺内側に浅いくぼみが設けられるようになっていく(図2-8・10)。

円筒土器上層b式(縄文時代中期前葉)

全18例中5例が館崎遺跡で上層a2式に引き続きもっとも多いが、北斗市^{たての}館野2遺跡、村前ノ
 沢、函館市陣川町遺跡、サイベ沢遺跡、函館市(旧戸井町)浜町A遺跡と津軽海峡沿岸部にお
 いて東側に広がっている。それから森町オニウシ遺跡、^{くらちがわ}倉知川右岸遺跡と北にも分布の広がりが
 窺われている。虻田町入江遺跡にも破片資料がある。顔の認定については様々な疑義が予期
 されることから、ここでは資料を厳選したが、後述しているように、もし土器に対する顔表現
 が各型式の典型的な特徴をよく反映してなされるものであるならば、円筒土器上層b式期がもっ
 とも盛んに顔表現が行われた段階であった可能性もある。

円筒土器上層b式では文様帯の貼付が徐々に細くなっていく。そして、おおむね突起下に局
 限していた貼付装飾が文様帯全体に広がっていくようになる。突起下に垂下する貼付を中心軸
 にした線対称の構成が多いが、基本的には突起部を中心に円形、楕円形、三角形の貼付の組み
 合わせで定形的かつ簡素に、顔を表現するものが多い。それらの目や口に相当する区画内には
 地虫状の縄圧痕^(10同)が充填される場合もある。

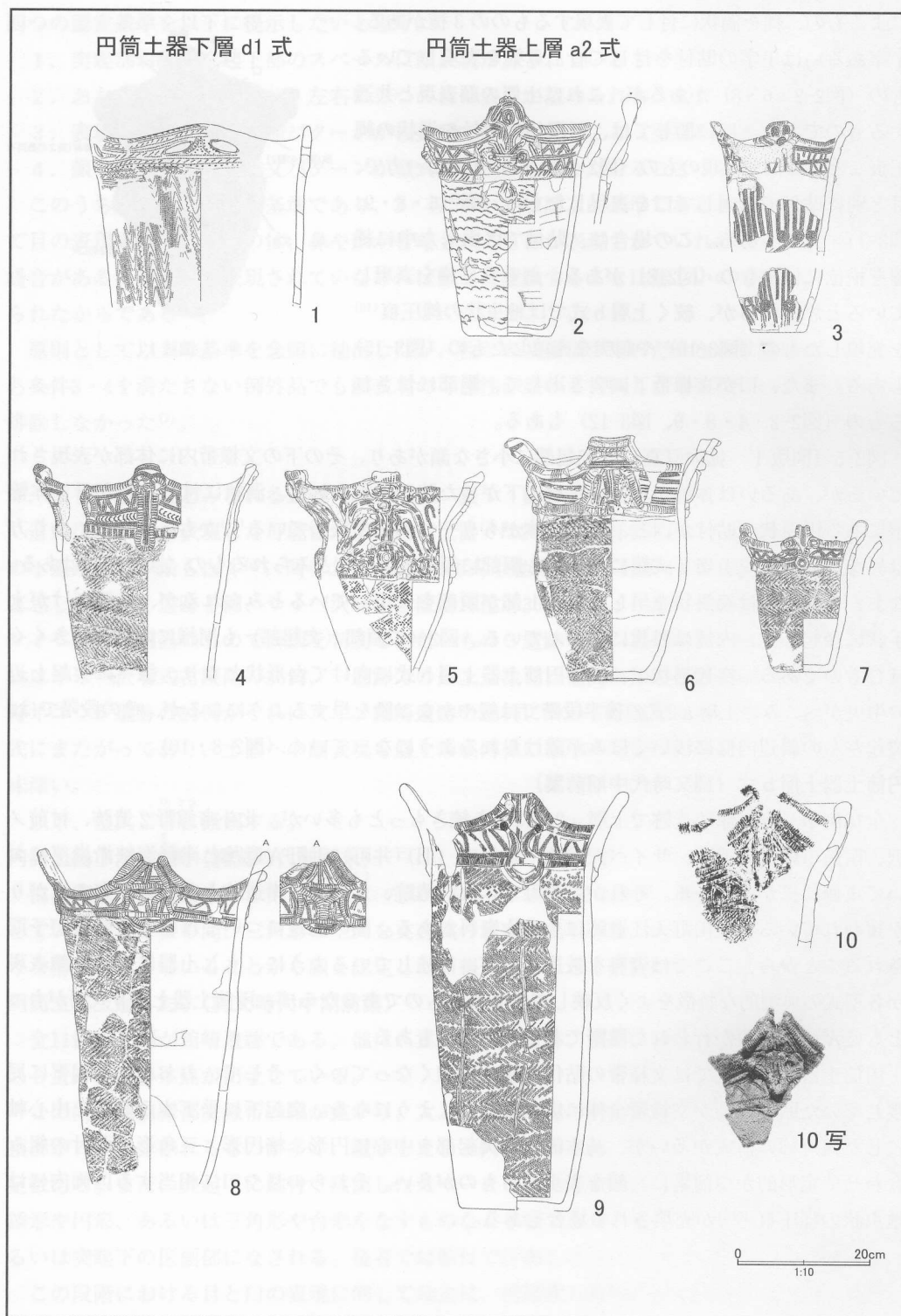


図2 北海道内出土の顔を表現した円筒土器(1)

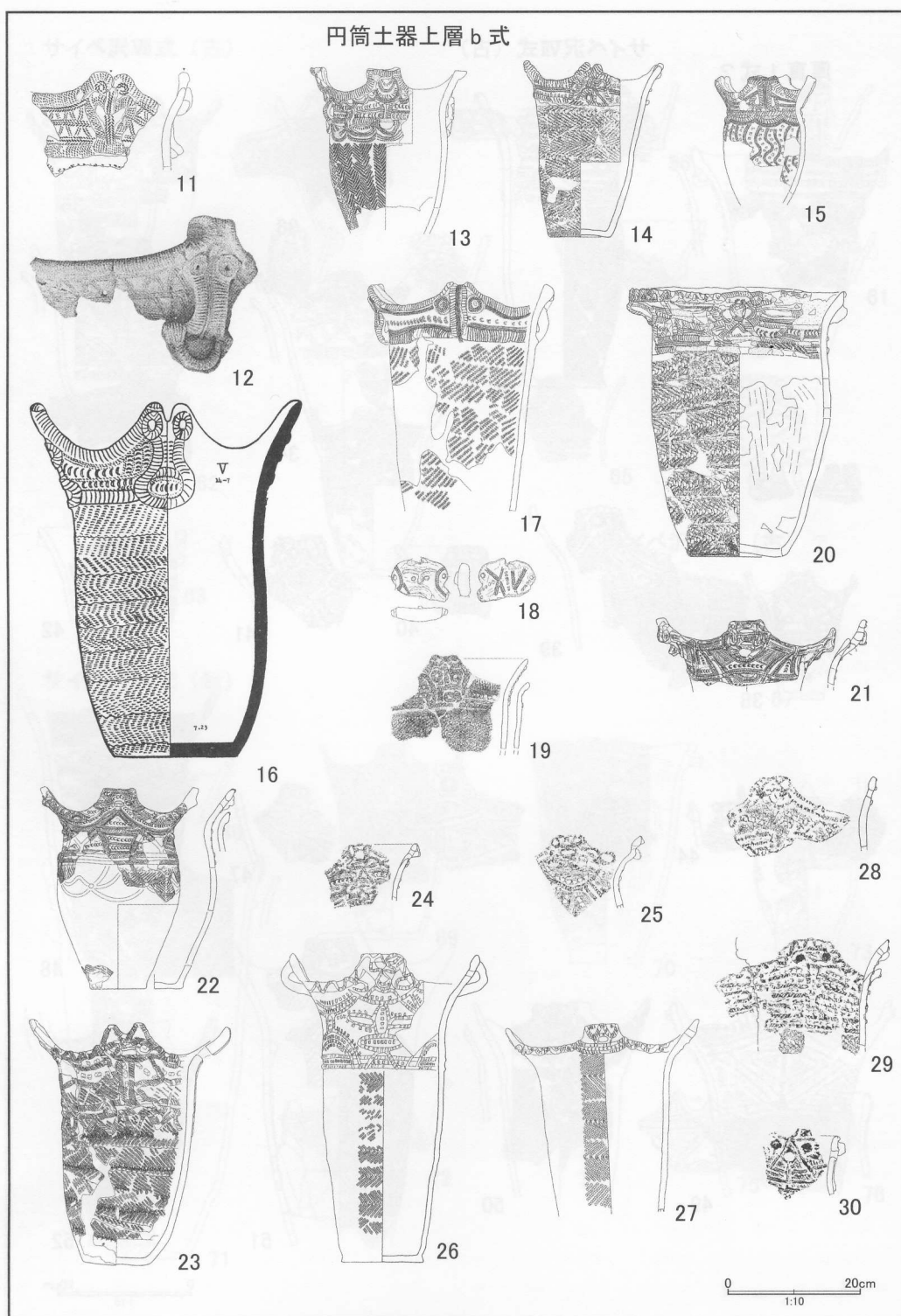


図3 北海道内出土の顔を表現した円筒土器(2)

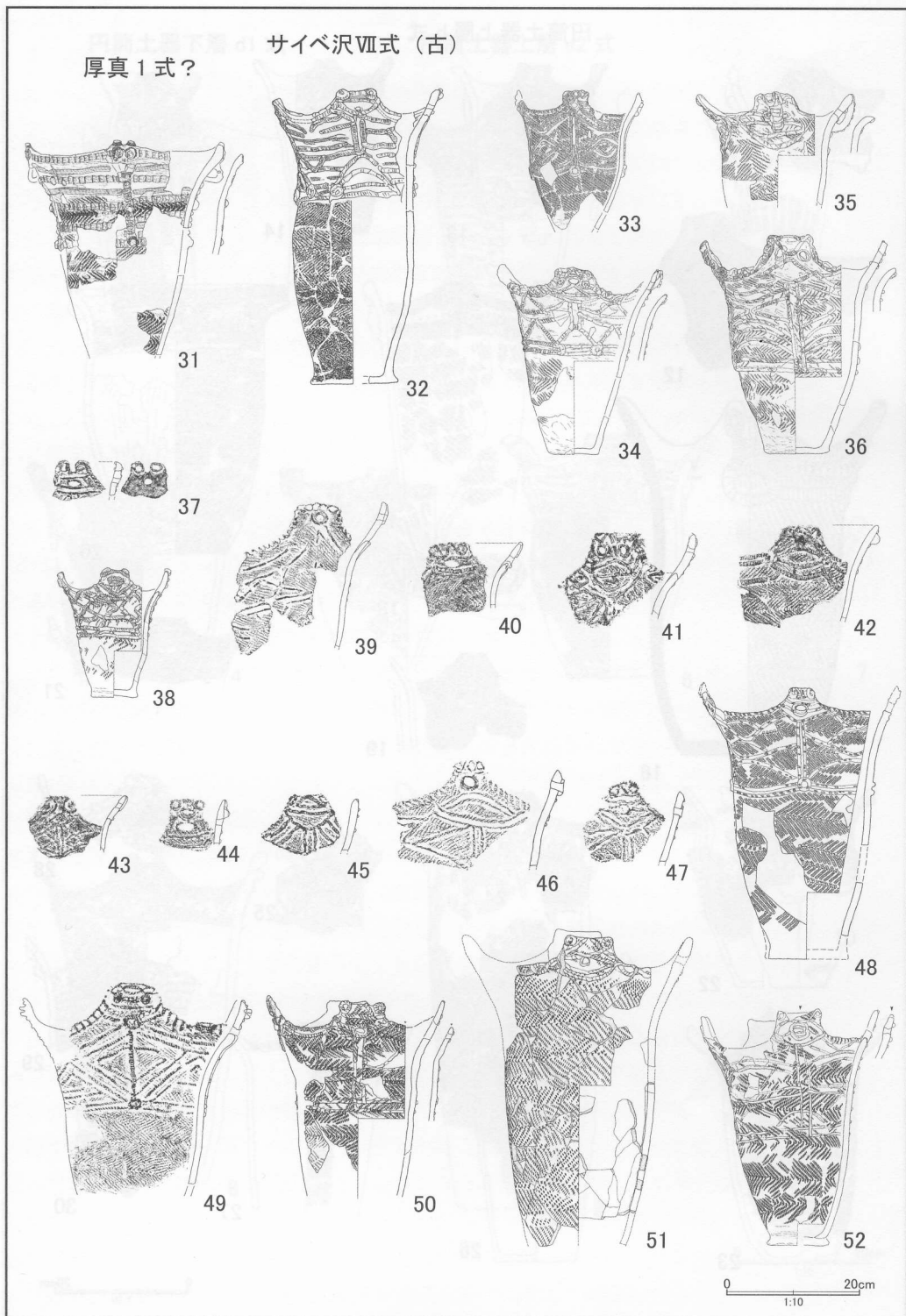
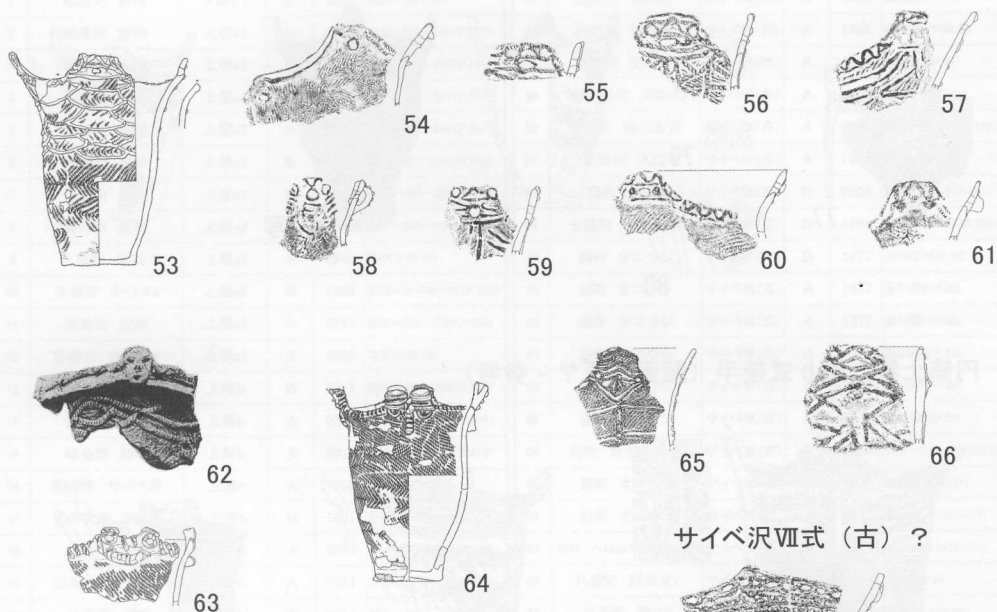


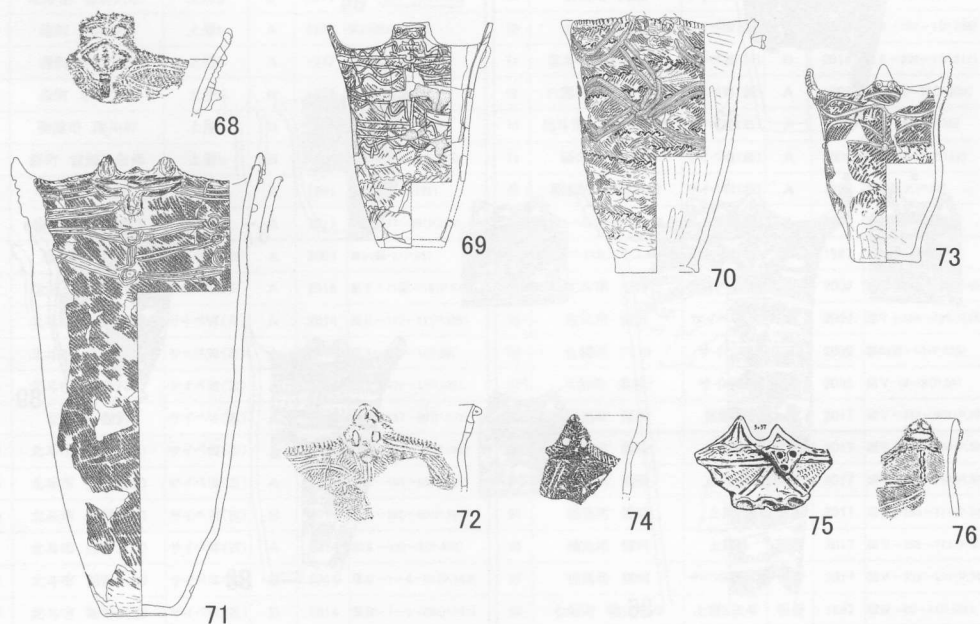
図4 北海道内出土の顔を表現した円筒土器(3)

サイベ沢Ⅶ式（古）



サイベ沢Ⅶ式（古）？

サイベ沢Ⅶ式（新）



0 20cm
1:10

図5 北海道内出土の顔を表現した円筒土器(4)



図6 北海道内出土の顔を表現した円筒土器(5)

表1 北海道内出土の顔を表現した円筒土器一覧

No.	遺跡名	型式	判定	文献年	図番号(ページ)	No.	遺跡名	型式	判定	文献年	図番号(ページ)
1	福島町 館崎	下層d1	B	1985	図23-25(P.55)	46	函館市 陣川町	サイベⅦ(古)	A	1989	第60図7(P.79)
2	福島町 館崎	上層a2	B	2017	図V-229-569(P.242)	47	函館市 陣川町	サイベⅦ(古)	A	1989	第67図1(P.89上)
3	福島町 館崎	上層a2	B	2017	図V-236-588(P.249)	48	函館市 陣川町	サイベⅦ(古)	A	1989	第73図1(P.97)
4	福島町 館崎	上層a2	B	2017	図V-237-591(P.250)	49	旧戸井町 浜町A	サイベⅦ(古)	A	1991	図18-45(P.31)
5	福島町 館崎	上層a2	A	2017	図V-238-592(P.252)	50	七飯町 鳴川右岸	サイベⅦ(古)	A	1994	図VI-21-78(P.122)
6	福島町 館崎	上層a2	B	2017	図V-239-593(P.253)	51	虻田町 入江	サイベⅦ(古)	A	1991	図132(P.164)
7	福島町 館崎	上層a2	B	2017	図V-241-598(P.256)	52	森町 森川4	サイベⅦ(古)	B	2005	図III-10-1(P.36)
8	福島町 館崎	上層a2	A	2017	図V-244-608(P.259)	53	七飯町 鳴川右岸	サイベⅦ(古)	B	1994	図VI-22-79(P.123)
9	八雲町 栄浜1	上層a2	A	1998	図8-1(P.17)	54	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	B	1977	第20図18(P.37)
10	千歳市 キウス5	上層a2	B	1998	図Ⅷ-3-10-30(P.129)	55	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1977	第21図9(P.38)
11	福島町 館崎	上層a2	A	2017	図V-252-634(P.267)	56	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1977	第22図1(P.39)
12	室蘭市 ボンナイ	上層a2	A	1962	写真74(P.38)	57	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1977	第22図3(P.39)
13	福島町 館崎	上層b	B	2017	図V-262-658(P.281)	58	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1977	第22図4(P.39)
14	福島町 館崎	上層b	A	2017	図V-276-693(P.295)	59	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1978	第22図5(P.39)
15	福島町 館崎	上層b	A	2017	図V-299-751(P.319)	60	森町 倉知川右岸	サイベⅦ(古)	A	2004	図V-14-43(P.223)
16	函館市 サイベ沢	上層b	A	1958	第91図左(P.70)	61	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1977	第20図15(P.37)
17	旧戸井町 浜町A	上層b	B	1991	図10-5(P.23)	62	森町 オニウシ	サイベⅦ(古)	A	1965	第3図-9-10(P.91)
18	福島町 館崎	上層b	A	2017	図V-303-768(P.323)	63	泊村 ヘロカルウスG地点	サイベⅦ(古)	A	1997	第74図-16(P.141)
19	北斗市 村前ノ沢	上層b	A	2017	第Ⅱ-52図・72(P.74)	64	八雲町 野田生1	サイベⅦ(古)	A	2003	図9-1(P.9)
20	福島町 館崎	上層b	B	2017	図V-294-739(P.313)	65	岩内町 東山1	サイベⅦ(古)	B	2004	第61図-2(P.85)
21	北斗市 館野2(C)	上層b	B	2014	図Ⅲ-1-2(P.134)	66	泊村 ヘロカルウスA地点	サイベⅦ(古)	B	1987	第46図-38(P.70)
22	北斗市 館野2(C)	上層b	B	2014	図Ⅱ-513-4(P.63)	67	礼文町 上泊3	サイベⅦ(古)?	A	1985	図V-53-62(P.146)
23	旧戸井町 浜町A	上層b	A	1991	図70-9(P.94)	68	八雲町 山越2	サイベⅦ(新)	A	2001	図IV-4-9(P.120)
24	北斗市 館野2(C)	上層b	B	2014	図Ⅱ-280-28(P.293)	69	虻田町 入江	サイベⅦ(新)	A	1991	図137-1(P.172)
25	森町 オニウシ	上層b	A	1977	第23図12(P.40)	70	北斗市 館野	サイベⅦ(新)	A	2012	図V-101-1(P.239)
26	森町 オニウシ	上層b	A	1977	第14図15(P.31)	71	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(新)	B	2014	図Ⅱ-208-1(P.217)
27	森町 オニウシ	上層b	B	1977	第13図・9(P.30)	72	八雲町 コタン温泉	サイベⅦ(新)	A	1992	第158図-58(P.203)
28	函館市 陣川町	上層b	B	1989	第134図50(P.164)	73	北斗市 当別川左岸	サイベⅦ(新)	A	2015	図V-1-3(P.45)
29	森町 倉知川右岸	上層b	B	2004	図V-13-38(P.222)	74	岩内町 東山1	サイベⅦ(新)	A	2004	第118図-12(P.169)
30	虻田町 入江	上層b	A	1991	図140-24(P.177)	75	函館市 サイベ沢	サイベⅦ(新)	A	1958	第70図上(P.50)
31	厚真町 上幌内3	厚真1?	A	2017	図IV-77-35(P.284)	76	泊村 ヘロカルウスA地点	サイベⅦ(新)	A	1987	第47図-49(P.71)
32	岩内町 東山1	サイベⅦ(古)	A	2004	第34図-2(P.53)	77	泊村 ヘロカルウスA地点	サイベⅦ(新)	B	1987	第47図-48(P.71)
33	北斗市 茂辺地4	サイベⅦ(古)	A	2015	第Ⅱ-11図-19(P.27)	78	北斗市 館野	サイベⅦ?	A	2007	図V-264-129(P.65)
34	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	A	2014	図Ⅱ-157-12(P.165)	79	北斗市 館野	サイベⅦ?	A	2007	図V-264-130(P.65)
35	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	A	2014	図Ⅱ-530-1(P.80)	80	札幌市 K518	サイベⅦ	B	2009	第83図-53(P.320)
36	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	A	2014	図Ⅱ-572-1(P.122)	81	八雲町 落部1	サイベⅦ	A	2003	図V-18-19(P.85)
37	北斗市 館野	サイベⅦ(古)	A	2012	図V-127-90(P.272)	82	福島町 館崎	見晴町	B	2017	図V-342-906(P.368)
38	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	A	2014	図Ⅱ-157-13(P.165)	83	福島町 館崎	上層b	保留	2017	図V-258-708(P.302)
39	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	A	2014	図Ⅱ-163-43(P.171)	84	福島町 館崎	上層b	保留	2017	図V-258-710(P.303)
40	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	B	2014	図Ⅱ-285-50(P.298)	85	福島町 館崎	上層b	保留	2017	図V-258-711(P.304)
41	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	A	2014	図Ⅱ-439-2(P.455)	86	福島町 館崎	上層b	保留	2017	図V-258-712(P.304)
42	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	B	2014	図Ⅲ-1-8-51(P.140)	87	福島町 館崎	サイベⅦ(古)	保留	2017	図V-258-812(P.340)
43	北斗市 館野2(C)	サイベⅦ(古)	B	2014	図Ⅲ-1-9-60(P.141)	88	七飯町 鳴川右岸	上層b後半	保留	1997	図Ⅲ-80-1(P.101)
44	七飯町 鳴川右岸	サイベⅦ(古)	A	1994	図V-11-7(P.42)	89	七飯町 鳴川右岸	上層b後半	保留	1997	図Ⅲ-84-53(P.105)
45	函館市 陣川町	サイベⅦ(古)	B	1989	第48図5(P.65)						

るいは土器の文様がたまたま顔のように配置されたものか、という問題が常について回る。集成した80点ほどの土器についても、顔表現したと認められるものから、顔表現なのかどうか疑わしいと映るものまで人により様々あるかと思うが、顔表現の可能性を感じつつも筆者の判断で今回の集成対象から外したものの相当数ある⁽¹²⁾。顔を表したとみられる土器にはこうしたグレーゾーンがあることから、例えば、A. 明らかに顔を表していると判断しうるもの。B. おそらく顔を表していると考えられるもの。C. 顔を表している可能性があるが断定しかねるもの（判断保留）など3段階程度に分ける必要があるかと考えられる（A・Bは表1中に記載）。それと並行して型式ごとの顔表現のパターンや特徴を見出し、認定条件となりうる定義的なものを整理する必要があるであろう。このような提案に対しては、Cは必要ないとする意見もあるだろうが、対象から排除した時点で「再検討する」可能性がゼロになってしまうので、顔表現という対象遺物の性格を考えても判断保留の枠を設けるべきと考えている。

たとえば、館崎遺跡出土の資料で、明確な目を表現していないことから、今回の集成に加えなかったものがある（図版2 道埋文2017『福島町 館崎遺跡』第2分冊P.294 図V-275-691）。しかし、見方によっては、逆Y字の貼付で鼻梁と口を表現した、目が省略された「^{うれ}憂い顔」である。貼付で区画された口に見立てられるところには、3本組の縄線文が横位に付されてもいる。今の人間が発想し表現することは、縄文人でも表現しうると考える立場として、筆者としてはこれが顔を表していないと断定することはできない。



図版2

次に円筒土器上層b式・c式段階における顔表現の問題である。前述のとおり成田によれば、青森県において上層b式・c式で顔が表現された土器は「現在の所発見されていない」（成田1991：2）ということであったが、今回の道内集成では円筒土器上層b式およびc式相当資料からも顔表現とみなされる資料を積極的に取り上げた。しかし、このことは円筒上層b式・c式期の北海道ではまとまった類例があり、青森県では類例がないという地域差を意味するものではない。実のところ同様のものは青森県でも相当数が出土しているからである。

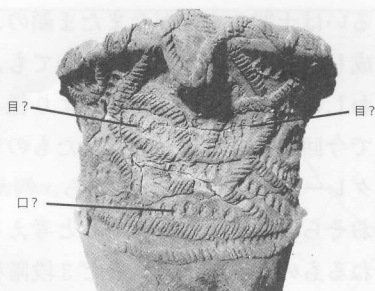
ここで集成として時系列に並べた1～82とは別に、円筒土器上層b式後半（顔面表現？）として末尾に例示した館崎遺跡出土の図6-83～89に注目していただきたいのであるが、仮にこれらの土器に対しても「顔表現が認められる」と言えば、あまり賛同は得られないであろう。

円筒土器上層b式・c式において、これらがあまりにもありふれた文様構成であり、当然ながら顔表現として認定すると類例が一気に増加すること（顔表現の土器がそんなにあろうはずがないという疑念）。文様帯の全体に貼付が施される段階であるため、顔表現が文様帯の中に同化しすぎて顔として際立たないものが多いこと。さらには一瞥すれば明らかのように、仮に顔表現であるとすれば戯画的なネコ顔、カエル顔等を想起させるものが多く、それがたとえ突起の形状や貼付のパターンに制約された結果であるとしても、そのような意匠⁽¹³⁾が縄文土器に表現されるはずがない、という拒否反応はあるかもしれない。

しかし、図6-85・86など口に相当するとみられる区画内にたとえば3本組の縄線を横位に付

すパターンは、上層 a 2 式の図 2-8 ととも共通しており、口表現の手法が踏襲されている可能性を否定できない。

また、図 6-87 (図版 3 写真) は胴部の網目状の貼付帯の中に目の吊り上った「怒り顔」を見出したものである。魔除けとしての鬼瓦のような造形物が存在する以上、縄文土器の顔表現にも同様のものがあつた可能性がないとは言いきれない。



図版 3

さて、ここまですを整理すると、少なくとも、

1. 「顔」をまとまりで認識する普遍的な本能が人間には備わっている。
 2. 顔そのものだけでなく、顔ではない「顔らしきもの」に対しても、人は反射的に顔を想起することがある。
 3. 縄文人にももちろんそれらの本能は備わっていたと考えられる。
 4. したがって縄文人自身の造形物である土器に「顔らしきもの」が表現されているなら、それは顔を表現した可能性が高いと判断される。類例が一個体、二個体であれば、偶然に文様配置が「顔らしきもの」になった可能性も考えられるであろうが、複数例があり、特定の遺跡でまとまった数が出土している状況から、偶然とは考え難い。
- ということと言えるであろう。

ここで顔を表現したとみなされる土器の類例を広く見渡すと、どの地域のどの型式においても、その型式の特徴を組み込んだ顔の表現になっていることに気づく。本稿の検討対象である円筒土器で見ると、円筒土器上層 a 2 式は突起下に太い貼付で区画を形成することを大きな特徴とする。そこに顔を表現すれば、それは「顔らしく」目立つであろう。かたやサイベ沢Ⅶ式、本州でいう円筒土器上層 d 式、e 式期は、文様帯が縮小し、小ぶりになった突起周辺にしか貼付等の装飾がなされなくなっている。そこに収斂して顔を表現すれば、それはやはり「顔」として見つけやすいであろう。しかし、円筒上層 b 式・c 式期は貼付が細くなり、文様帯全体に及ぶ。その中に顔が表現されていたとしても、上層 a 2 式やサイベ沢Ⅶ式のようには見出しにくくなるのは当然のことであろう。もし仮に各型式が各型式の典型的な文様帯表現の中で顔を表現しているのであるならば、円筒上層 b 式・c 式においても、その文様帯表現等、型式的特点の中で顔が表現されていた可能性は考えられる。筆者はあるいは円筒上層 b 式・c 式こそ、もっとも顔表現がなされた型式であるかもしれないとも考えている⁽¹⁴⁾。

6. 顔を表現した土器が作られるようになった成因について

最後に、円筒土器上層式段階になって顔を表現した土器が多く作られるようになった成因について述べてみたい。

館崎遺跡で出土した土器の復元個体については、大きさ、器形、器壁、文様等、考えられる限りの諸属性を計測・観察し報告書に記載した。結果、円筒土器下層 d 1 式の後半から下層 d 2

式にかけて土器の大型化現象が数値的に確認された。しかし、円筒土器下層式期を通じて踏襲されてきた繊維を多く含んだ内部空隙の多い器壁では急激な大型化に十分対処できなかったようで、下層 d 2 式の後半段階で大型化は頭打ちとなり、続く上層 a 1 式期では一時的に縮小化する。上層 a 1 式において、文様帯下の胴上部が外側へ膨らむものが散見されるが、おそらく造形的なものではなく、大きく開いた口縁部文様帯の重さに器壁が耐えられなかったため、そうした形状にならざるをえなかったのであろう。大型化に対応すべく器壁が遅れて変化し、上層 a 2 式期に至って土器の大型化と耐久性の両立が一定程度達成されるに至っている。そして耐久性が増したことによって副次的にその表現幅も拡がりをみせるに至った。具体的には大ぶりな突起の造形や文様帯内の貼付装飾である。大型化の需要に対応すべく土器が強靱化したことにより、それまで技術的に不可能であった様々な表現が可能になり、円筒土器上層式的な様式が確立されたと考えられる。

ここで広域での同時代の状況に視界を拡げてみると、土器が大型化したり、量産されたり、装飾造形が盛んになるという現象は、北は渡島半島から南は甲信越地方に至るまで、東日本全体で連動して起こっている。したがって土器の強靱化に関するノウハウ、粘土精製や焼成技法を含んだ土器生成に関する技術革新は、円筒土器文化圏に局限されるものではなく、おそらくは広域で共有されていたもので、他地域から伝えられた可能性が高いと考えられる。同時期の山梨県や長野県では明らかに顔を表現した土器が多数作られており、同時に土偶の出土数も急増していることが古くから知られている⁽¹⁵⁾。土器の技術革新とともにそうした造形面のモチーフも伝わって来た可能性⁽¹⁶⁾は十分に考えられることであろう。

造形物の歴史を俯瞰すると、絵画にせよ彫刻にせよ人間、特に顔を表現したものが非常に多いことが想到される。特に立体造形の技術が確立された際に、人間の潜在的な表現欲求として顔を造形した蓋然性は高いとみるのであるが、いかがであろうか。

謝辞

まず、館崎遺跡の調査から整理・報告にかけて 8 年間、共に作業に携わった中山昭大^{あきひろ}、福井淳一、柳瀬由佳の 3 氏に感謝の言葉を申し上げたい。同僚の阿部明義氏は土偶研究会の北海道大会が 2015 年に行われた際、予定にはなかったこのテーマについての発表の場を筆者に便宜したださった。そして発表後には成田滋彦氏から励ましの言葉もいただいた。もし、この機会がなければ、顔表現の可能性については報告書内の記載で完結し、本稿執筆には至らなかったであろう。阿部氏、成田氏ならびに土偶研究会の諸氏にこの場を借りて深謝する次第である。

土器に顔を表現しているという見解にはもちろん懐疑的な意見もあった。その立証をどうしたら良いか思案していた時、偶然中央大学の山口真美教授^{まさみ}（心理学）の研究チームによる顔認知の研究を知った。山口先生とは面識がなかったが、手紙を書いたところすぐに関係資料を添付したメールが送られてきた。山口先生はさらに九州大学の橋彌和秀准教授を紹介して下さった。多忙にもかかわらず一面識もない分野外の人間の相談に快く応じて下さった山口先生、橋彌先生にも、この場を借りて厚く御礼申しあげたい。

註

- (1) この種の土器について「人面意匠」「人面を表現した」という表記もあるが、人の顔である保証はないという観点から、筆者は「顔を表現した土器」とする。
- (2) 本稿で提示した基準でみるならば、青森県で顔を表現した可能性のある円筒土器は、少なくとも数百点の単位で数えることができる。
- (3) しかし、発掘担当者（報告者）が顔表現の可能性を報告書に記載しているか否かに関係なく、報告者の判定が遺構遺物の最終評価ではない以上、集成者が集成者の基準なり観点で集成するのが本来の集成であろう。そもそも行政発掘担当者（報告者）の仕事は、まず調査結果の事実を報告することであり、調査結果や出土遺物に学術的な評価を与えることではないからである。
- (4) 顔の認識については、顔以外の物体の認識と異なり、全体的な構成－まとまりとして認識、処理することが知られている（Maurer, Le Grand & Mondloch, 2002）。
- (5) 雲の形状などを眺め見て視覚刺激を受け、本来そこにまったく実態が存在しないとわかっているにもかかわらず、顔など馴染みのあるものを想起するパレイドリアという心理現象もある。
- (6) 土偶・岩偶（石偶）や土板・岩板においては、目が表現されていないもの、目の表現が不明瞭なもので「顔表現」とみなされているものが少なからず存在している。熊本県上南部遺跡出土土偶、熊本県竹ノ後遺跡出土土偶、福島県真石貝塚出土土板、宮城県根岸遺跡出土岩偶等。本文中に述べているように、人間には本能的に省略物の補完機能が備わっているので、ここでそれらの土偶や土板が省略された顔表現であることを否定するわけではないが、人の形である土偶はともかくとして、四角形や楕円形の土板・岩板が顔表現とスムーズに承認され、その一方で土器であれば顔表現と容易には承認しがたいというのであれば、土製品（特別なもの）と土器（ありふれたもの）という先入観による認知バイアスが、観察者や研究者の判断に作用しているのではないかと疑わざるを得ない。後述するように、目を省略した「顔」表現の土器（図版2）も存在する可能性はあるが、人の形をなさない土器に対する顔表現という性格を考慮し、あえてここでは「目」の表現を条件とした次第である。
- (7) 手作りの産物である考古資料に関しては、イレギュラーな要素がつきものである。ある程度の定義や原理原則を示すことはもちろん必要であるが、そこに収まらないものも必ず生じると考える。
- (8) 写真では顔を表現していると映るのに、実測図ではまったくそのように映らない土器が何例もあった。任意サイズで写真の方も掲載したものがあるのはそのためである。
- (9) 日本全体では縄文時代前期の宮城県上川名貝塚出土の類例がもっとも古く（藤沼編 1997）、前期後半の諸磯B式にも類例があるという（佐原・小林 2001）。
- (10) いわゆる馬蹄形圧痕文と称されるものである。筆者は、これがハチノコ等の地虫類を模したもので、特に円筒土器上層Ⅱ式後半段階の網目状に貼付が展開する文様帯は、採取した地虫類（食料）を入れた編み籠を表現したものではないかと考えている。
- (11) 土偶の中にも胴部に第二の顔を表現しているものや、小さな顔がトーテム状に複数内包されているもの、両脇の空隙で目を股間の空隙で口を表現したもの（茨城県御所内遺跡出土ミミズク土偶・栃木県後藤遺跡出土ミミズク土偶等）が一定数あると考えられる。一例を挙げれば旧南茅部町著保内野で出土した国宝土偶の乳房などは眼状紋の可能性が窺われる。
- (12) 今回の集成から外した土器についても、可能性があるものについての一覧表を付して言及することを企図したが、紙幅の都合でできなかった。どこまでを顔表現と認定するかが基準次第で大きく変わってくるという根本的な問題はあるが、顔表現の可能性があるので文様と判断され報告書に掲載されなかったものは相当数があると思われる。
- (13) 土偶・岩偶で見えていくと、本稿で筆者が可能性として提示している土器への「顔表現」と同等程度に、誇張的で人間離れた顔表現は枚挙にいとまがないほど存在する。また、各地の祭礼で用いられている顔表現の造形物に関しても、長野市芦ノ尻の神面道祖神、鹿児島県石島のボゼ、硫黄島のメンドン、甌島のトシドン等、同様のものを挙例することができる。従って誇張的で人間離れた造形であることを理由に「顔ではない」と判断する根拠にはなりえないと考える。

- (14) 円筒土器で顔表現がなされたものについて全体的な傾向を知るためにも将来的に北東北、特に青森県での真の集成が必須であると考ええる。北東北の円筒土器を対象とした集成がなされ、各型式の特徴や変遷が整理されれば、円筒土層 b 式・c 式期が本当に顔表現の空白期間であるかどうかとも明らかになってくるであろう。
- (15) 縄文時代前期以前の土偶は簡素な作りで極度に抽象化された人の形で、顔を表現していないものが多いが、中期に入ると出土点数とともに顔を表現したものが急増する。土器と土偶、両者の顔表現には密接な関係があると考えられる。
- (16) 館崎遺跡では基部が大きく抉れた石鏃 1 点が出土したが、分析の結果、長野県和田峠（判定は観音沢）の黒曜石製であることが判明した。これが当該期の長野県と北海道南部との直接的な交流を物語る証拠であるとは考えないが、縄文時代中期前半の長野県に顔表現の土器が多くあり、東日本各地に顔を表現した可能性の窺われる土器が分布している状況と併せて考えると、少なくとも間接的には情報やモノが広域で流通していた可能性があると思われる。

引用参考文献

虻田町教育委員会

1991『入江遺跡発掘調査報告』

岩内町教育委員会

2004『岩内町 東山 1 遺跡』

大島直行

2016『縄文人の世界観』東京：国書刊行会

大場利夫

1965『北海道の人面文様土器』『北海道考古学』1 札幌：北海道考古学会 88-92

葛西 励

1980『顔面付円筒土器』『うとう』86 青森：青森郷土会

小杉 康

2006『土器造形の発達とカテゴリー操作』『心と形の考古学－認知考古学の冒険－』東京：同成社 101-132

札幌市教育委員会

2009『K518遺跡 第2次調査』札幌市文化財調査報告書88

佐原真・小林達雄（対論）

2001『世界史のなかの縄文』東京：新書館 104-110

戸井町教育委員会

1991『浜町 A 遺跡Ⅱ』

泊村教育委員会

1997『ヘロカルウス遺跡 E～G 地点』

成田滋彦

1991『青森県の顔面付き土器－縄文時代中期を中心に－』『青森県考古学』6 青森県考古学会 1-4

1994『青森県の顔面付き土器（補遺）－縄文時代中期を中心に－』『青森県考古学』8 青森県考古学会 26-27

函館市教育委員会

1989『陣川町遺跡』

函館博物館

1958『サイベ沢遺跡』

平山久夫

1997『円筒土器に於ける人面土器の研究』『北奥古代文化』26 東京：北奥古代文化研究会 61-64

福島町教育委員会

1985『館崎遺跡－円筒土器文化における「土器塚」の調査－』

藤沼邦彦

- 1997『歴史発掘 3 縄文の土偶』東京：講談社 60
- 藤沼邦彦・栗原 徹
- 2008「青森県五戸町大久保遺跡出土の縄文中期の顔面付土器」『亀ヶ岡雑考集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告7 青森：弘前大学人文学部日本考古学研究室・弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター 69-77
- 北斗市教育委員会
- 2015『北斗市 茂辺地4遺跡』
- 2017『北斗市 村前ノ沢遺跡』
- 北海道文化財研究所
- 1987『ヘロカルウス遺跡』泊
- 北海道埋蔵文化財センター
- 1985『礼文島幌泊段丘の遺跡群』北埋調報19 札幌
- 1994『七飯町 鳴川右岸遺跡』北埋調報87 札幌
- 2001『八雲町 山越2遺跡』北埋調報163 江別
- 2003『八雲町 落部1遺跡』北埋調報181 江別
- 2003『八雲町 野田生2遺跡』北埋調報183 江別
- 2004『森町 倉知川右岸遺跡』北埋調報196 江別
- 2005『森町 森川4遺跡』北埋調報218 江別
- 2007『北斗市 館野遺跡(1)』北埋調報237 江別
- 2012『北斗市 館野遺跡(2)』北埋調報282 江別
- 2014『北斗市 館野2遺跡C地区』北埋調報303 江別
- 2015『北斗市 当別川左岸遺跡』北埋調報310 江別
- 2017『福島町 館崎遺跡』北埋調報333 江別
- 2017『厚真町 上幌内3遺跡』北埋調報335 江別
- 室蘭市教育委員会
- 1962『室蘭遺跡』
- 森町教育委員会
- 1977『森町オニウシ遺跡発掘調査報告』
- 八雲町教育委員会
- 1992『コタン温泉遺跡 縄文時代集落と貝塚の調査』
- 吉本洋子・渡辺誠
- 1994「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究」『日本考古学』1 東京：日本考古学協会 27-85
- 1999「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補)」『日本考古学』8 東京：日本考古学協会 51-85
- 2005「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補2)」『日本考古学』19 東京：日本考古学協会 73-94
- Ichikawa, H., Kanazawa, S., and Yamaguchi M.K. (eds.)
- 2011 *Finding a face in a face-like object: Perception*, 40, 500-502. J-STAGE (www.jstage.jst.go.jp) DOI: 10.1068/p6926 National Institute of Informatics
- Kobayashi, M., Otsuka, Y., Nakato, E., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., and Kakigi, R.
- 2012 *Do infants recognize the Arcimboldo images as faces? Behavioral and near-infrared spectroscopic study.* : *Journal of Experimental Child Psychology*, 111, 22-36. J-STAGE (www.jstage.jst.go.jp) DOI: 10.1016/j.jecp.2011.07.008 ELSEVIER
- Maurer, D., Le Grand, R., & Mondloch, C.J.
- 2002 *The many faces of configural processing: Trends in Cognitive Sciences*, 6, 255-260. ELSEVIER